講演 福祉の学び、福祉の実践、そして地方行政
久留米大学文学部社会福祉学科開設記念講演会 記録

<p>| | |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>潮谷 義子</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1-2</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>99-107</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2001-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/11316/665">http://hdl.handle.net/11316/665</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
講演II
福祉の学び、福祉の実践、そして地方行政

瀬谷義子先生

1. ライフワークとしての「福祉」
   ・「志」の動機と変化
   して上げる→してみたい→する
   ・1958年～1962年の日本社会事業大学と私
2. 気付きは遅く、しかも今も深く私に存在する恩師群の影響
   ・理論と実践の育み
   カリキュラム、学生の頭脳、感性、胃袋
   まで満たす教育実践
   ・ケース事例に学ぶ
   ・出会いのすばらしさ
3. 副知的事、そして知事へ
4. 政策の視点と福祉観
   （当日パンフレットから）

はじめに

こんにちは。私は第一部のところを遅れて何ったのですか。ある意味では遅れて良かったのではないかと思います。今、仲村先生のお話の中で、理事長、学長、文学部長の先生方のお言葉の引用がありましたので、そうした言葉を直接耳にいたしましたならば、もう話さない方がいいという気持ちになったのではないかと思います。

まず、最初の学科教員代表のお話の中で、久留米大学社会福祉学科の特色というのは福祉哲学を持たなければならないということ、あるいは福祉科学の追求が必要であるということ、その2点をお聞きしましたときに、私はこれまでの社会福祉というものが学問的な領域の中でここまでたどり着いたという思いをひしめかせられたところでございます。

社会福祉という領域の中には哲学が必要であり、社会福祉の科学性が求められなければならないということは、まさに私のお挙げの項目の中で言いますと「気づきは遅く、しかし今も深く私に存在する恩師群の影響」ということで、振り返った時に何を残し

でしたら、それは社会福祉の領域の中で大事な部分だと以前から申し上げてまいりましたが、大体にしてきました。再び社会福祉学科の教育関係者とも申しましょうか、そこで当事者参加があった。しかし6人のみなさんたちがゼミを通してこの7ヶ月間の感謝と展望に触れられました。その質の高さは、もちろんおきる学生のみなさんたちにかかわらずをお持ちになっていらっしゃるゼミの先生方の質の高さの裏返しだという感じをいただきます。

控え室で仲村先生と二人で、「もうお話ししないでいいような気がする」と確認したところですけれども、それでも若い皆さん方に、何かような学びをしたのか、そしてそれがどんなに素晴らしいものであったかという事をお伝えしたいし、そしてどうしてもっと1年生の時から耳を傾けなかったのだろうという残念さが今もなお残っているという思いをお話しさせていただこうと思っています。

福祉への「志」

これはゼミの学生さんのどたかの言葉の中にもありましたし、私は中学生の時に読みましたシュバイツァーの伝記に大変憧れまして、社会福祉ということがわからくて慈善という領域の中で、シュバイツァーの才能あるいはシュバイツァーの生き方、あるいはシュバイツァーの哲学性、そのようなことは論外の話なのでですが、思春期の中でその美しい行為に胸を打たれ、そして自分もうそういった中に身を置きたいという渾然とした思いがありました。そして高校3年生の時に、将来どういう職に就きたいかという地元新聞のインタビューがあって私は捉えどころのない話をしたわけですけれども、それをお読みくださった佐賀県社会福祉協議会の方が、こういう大学があるということで日本社会事業大学と大阪の社会事業大学の紹介をしてくださいました。大阪
社会事業大学は二年制の大学で、これはやがて府立大学に吸収されていく訳ですが、私の時にはまだ二年制で、佐賀県は奨学金を出したいから学びた處が四年制の大学で学んでもないということもあり、私は日本社会事業大学に出ました。

ところが、水本哲郎先生と言われる先生がいらっしゃまして、この先生の最初の授業で、「社会事業と慈善は違う」という言葉を聞いてただけで私は頭の中が真っ白になりました。「学校の選択を間違えた」と思い、私は保証人となってくれた親類が早稲田大学の前でセイブドゥという書店を聞いていますので、そこに走込みまして「もう大学を辞めようと思う、やっぱり地元に帰りたい」と言いました。大変貧しい中で進学をしたもののですから帰りたいというふうに言いました。帰りの席で帰るのだからもう帰らぬ頑張ってみたらどうか」とながめすかされまして大学に残りました。

私の動機の中には「こういう仕事をしてみたい」という漠然としたものがあり、その気持ちは学びを通じて「誰かに何かをしてあげたい、社会のために何か私はしてあげたい、してあげる」という形ですっとか考えてきました。それはやがて私の中で、何かを私たちがするということの中では、本当にしてあげたいとかしてみたい、あるいは本当にやるようなであろうという決定に入ったときに、理論の問題と自分の中に学ぶということの追求、なぜそうしたいかという動機性との問題がいつも追及されてこなければならいないのではないか、そのようなことをこの学校を通しながら学んだわけです。

日本社会事業大学の基礎教育

1958年から62年の日本社会事業大学の状況はほとんど仲村先生が触れられましたので私はあえて深く触れようとは思いませんが、日本全体もまだ貧しさの中にあって高度成長というようなものからまだちょっと下がったところにあり、福祉というのはその一番根幹に座っていたのは生活保護法でした。現在、社会福祉法、八法の改正、公的扶助だけが残された形の中での改正ということを経験しているわけですねけれども、そういった点で私どもの時代というのは、大きな差があったという感じがしております。その社大時代を振り返って考えてみますと、実は昨日史と話をしていたのですが、私たちは大学の中で基礎教育という点でレベルの高い教育受けてきたのではないかという感じがいたします。私たちは学んだ時にはと今とは、先ほど申しましたように時代的に大きな変化ということを経験しております。経済的な状況も人の生き方の問題もあるあるいは政策論の中で社会保障ということを考えたときに、その変遷はめざましいものがあります。

では、私どもがかつて学んだ教育が、そうした時代性や歴史性や社会保障の変遷の中で対応しあたまるものであったのかということを考えたときに、私は改めて大学に感謝をするのです。それは、基礎教育がしっかりしていたからとどんな時代の中でもどんな社会福祉の、社会保障の、あるいは社会事業と呼ばれる初期の形態の中であったにしても、そのときに真横かすかにできたという感じが非常に残っているからです。それは専門領域の人たちから見ればレベル的にはささやか低いというよりもあるかもしれませんが、私はそういった時代の中に対応できる基礎を育んでいただきたいくことで非常に大事なものを得たと感じているところで、そしてその4年間、基礎教育の中で何が私の中に息づいていたかというと、一つは先生方のご自身、特に仲村先生がそうであっただけのような気がいたします。先生は「いや、僕はそんな態度ではなかった」と言われるかもしれませんが、私の中に存在する仲村先生の授業風景というのは、先生は自分の価値観を押し付けることはなかったということに気づくのです。先生が私たちに教えてくださったもの、それは非常に学問であったという気がいたします。その価値観というのは、それぞれの人格やそれぞれの人生を歩んできた中で育まれてきたものを生かしていきなさいと、私が教えたことに対してあなた自身が自分の価値観を投じして、そしてそれを展開するのですよというメッセージがあったと私はこの年になって考えます。そしてこの基礎教育という中で、先生方の専門領域は違っていても、ソーシャルワーカーとしての視点ということが社会事業大学の底流としてあったと感じることも感じるので、率直に申し上げまして、今、社会福祉にかかわる大学がいろんなところにできております。その成り立ち、あるいは目的でございますと、そのことによって
学校が経営的に打開されていくとか、少子高齢社会の中で学生を呼び込むためといった設立動機が時として感じられる場合がございますが、動機は何であれ、設立されますとその学校のカラーが非常に大事になっているのではないかと思います。おそらく社会福祉学科がこの久留米大学の中に生まれたということは、どんな社会福祉の従事者、人間像を育てていくか、保健・福祉・医療が教育の中にどう統合されるかという模索をされていかれるのではないかと想像しているところです。

ソーシャルワーカーの視点

私が私の中でそのカラーについて考えますと、いろんな意味でソーシャルワーカーとしての基盤を学生の中に作っていくというものがあったのではないかという気がいたします。先生方は一生懸命勉強なさっていらっしゃいしました。そしてそれを私たちにぶつけくださったり。常勤でおいでになってくださる先生たちはもうすごく高い先生方がおいでになって、その先生方からもまた自分の専門領域を一生懸命私たちに伝えてくださいました。そして、先生方がいらっしゃる人格的な態度というようなものが私たちの基礎に非常に影響を与えきったという感じがしてならないのです。

そういうソーシャルワーカーという視点の中で振り返ったときに、何を中心から得たのかということが問われてまいります。いくつかを代表的に申し上げますと、心理学の先生を通しながらいろんな心理学を学んだわけですが、それは今考えると福祉のカウンセラー的役割、そうした素地を作ってくれていました。もう一つは、権利の代弁者としての役割、これを私たちがやっていくことの大事さ、それから社会資源を含んで幅広く人と社会環境との調整を社会全体として捉えていくときに、そしてその人が生きていくということを考えたときに必要であるということを先生方たちは学ばせてくれたという感じがいたします。そして福祉哲学を持つことの大事さが忘れていないと思います。

今日、大学の中の資格として社会福祉士、介護福祉士あるいは精神保健士にかかわる福祉士というような形で資格がたくさん取れるようになりました。でも私は思うのです。資格は資格に過ぎない、紙の中に書かれているものが証明するのだろうか。むしろそうではなくて、その資格を習得するまでのプロセス、そこにこそ意味合いがあるのではないか、と。私の出ました母校、先ほど仲村先生のお話を中にもうありましたけれども、研究科は全国の中で社会福祉士の受験合格率トップを走っております。当初、社会福祉士の資格は、落とすための試験問題を作ってい$formula_1のではないかと言われると非常に難度の高いものでした。そうした中にありましたけれども、レベルの高いものをパーセンテージとして示しております。それはそれとして決して私は否定するものではないんです。しかし、何のために社会福祉士という資格を取り、あるいは介護福祉士という資格を取り、新たな精神保健領域の中の資格を取りとか、その資格に値する自分自身の人間的な証明があるということを胸に張って言える、これが大事な部分ではないかと考えるわけです。今後、学生の皆さんが資格を取られるときに、その資格に合格することも大事ですけれども、自分の中にヒューマンネットワークにかかわるサービスの担い手として自分がどのようなものを吸収したかこの資格を得たのか、あるいはこの資格を手に入れようとしているか、そうした追求の仕方はすごく大事なものではないかと私は感じているところです。

実習と理論の対峙

それから社大の中で振り返って考えますと、ソーシャルワーカーとしての視点の要の一つに実習があったと思います。幅広く社会資源を含んで人と社会環境の調整が重要ということを認識させられたと先ほど申し上げましたが、その一つのきっかけは社会調査であったと思います。1ヶ月近く現地に足を運び入ってまして、私は青森に参りましたけれども、言葉が通じない中で何を人間交流の手段にいくのかということを含めて、この実習は非常に学ぶものが多かったのです。そして休みが削られたという状況がありましたから、それでもなお私たちは皆さんとそういったものにかかわってきました。そして福祉事務所の実習です。冒頭に申し上げましたように当時の福祉の枠組となった大きな役割は共助扶です。福祉事務所に行き、生活者がいる実態をしっかり見ていくわけですね。ズルさや嘘、あるいは手伝いの枠組みを理解しようとしているわけですね。
久留米大学文学部記念社会福祉学科編集刊号（第1・2号）

すぐにそのスティグマと自らが思う生活保護を自覚しているような方、逆に生活保護はスティグマではなくない権利だと言われている人たちは、公的援助という同行国の政策の中でも人々の反応は違い、その中で人々はどのような生活をしているのか、私たちがかわる持つときにはどのような視点を持つことが必要であるかということを実習の中で知らされました。

例えば、保母資格を一つ取るにいたしましても、保育所の実習、幼稚園実習だけではなかったのです。その当時は、子どもたちがどのような栄養を摂る必要があるのかということ、香川県の大学では、調理の実習と栄養所要量の計算、食事を作り、そこまでやっていわけではない、非常にすごいことがやられていたのだと、そのような感じがするわけです。

そして、その集大成の中で、実習を通して理論と対峙させられる経験をいただきました。今でこそ理論と対峙するという言葉で一括りに表現しておりますが、どうしようもない“あがき”のようなものを感じ取っておりました。それが児童の中でどのような形で整理されていったかと申しますと、私は福祉の中でも生活保護にかかわりを持っている中で、法学で習いました憲法25条の生存の保障、叩き込まれるような形で生存権を保障するとの事実を学んだのですが、もう一つ忘れてならない所にありますのが憲法13条に論評を持つことの大事だったのです。憲法13条は、「すべての国民は個人として尊重される、生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の重視を必要とする」というものです。「すべての国民は個人として尊重される」という憲法25条と憲法13条というのは、現場に入ったらときに、これを教えてくださった小川政亮先生に感謝をいたしました。

生活保護法の中では裁量権という問題があります。弾力運用ということに当面していく、実はこの中で小川政亮先生と仲村兼一先生から学んだケースは、公的援助とケースワークの理論というのがよきにえましてまいりました。ケースワークというのは技術論と言われる場合がありますが、私たちの仲村先生から受けたケースワーク論は、実は思想論であったと非常に感じるわけです。弾力運用とか裁量ということによかわかりをもってまいりますと、憲法13条の理論と運用していかなければならないのではないか、生存権の保障ということを考えたときに、生活保護法は最低の生存の保障ということを法的な理念の中でやっております。しかし、弾力運用ということではなく裁量権が一人ひとりの中に問われているということを考えると、仲村先生ご自身もその裁量権という中にケースワークの理論、それを私たちの生き方あるいは人間性、あるいは福祉哲学と重ね合わせて考えるということ、それを私たちに託されていただいている気がいたします。その意味で、先生は私たちにご自身が持っている価値観を押しつけられなかった、そういう感じをしております。そうした中で考えてみますと、この憲法13条は自己決定と自己実現ということで社会福祉の概念あるいは人の生き方、ニーズが変わってまいりましたときには多様な選択肢が必要となってきております。しかし、その根幹に、どんなに時代が変わってもこの2つの憲法条項は福祉の思想性の中で含んでいかなければならないと感じているところです。

それから、仲村先生を筆頭として、どの先生の授業にも意欲的な柔軟性があったという感じがします。その柔軟性というのは、「私はこう思うけどあなた達はどうだ」というような、学生で未熟な私たちを対等な人間として扱ってくださった、そのような思いが私の中にあります。

私たちは、ライフワークとして動機を持ちながら福祉に出回っていくのですが、それを高め、さらに方向を決定づけてくださるのはやはり学問の領域であると思いますし、さらにそれを高めていくことが実践、実習といったものであると思います。実習を現場に出る前に学校の中でやってほしいということがありますが、ややすると実習を軽視されているのではないか、資格を取らせるためのカリキュラム設定に走りすぎているのではないかという気がしないでもありません。私自身も福祉施設の中で仕事をして、傍らで大学の非常勤講師をやってまいりましたが、大学のありが方も自分の体の中で感じてまいりました。だから学生のみなさん方にそうした柔軟性を触れ合いの中でどれくらい感じさせることができるか、このへんは大変難しい課題になってきたと思います。「理論は実践に学び、実践は理論に学ぶ」
それはを本当に感じます。そしてそれを吸い上げてい
くところのリカレントの教育というものが今後、こ
の大学の中でも将来的に必要になってくるのではないか。
が、それが自身の理屈や自分の職務で落と
し穴の中にすりとりと入込んでいく、自分の実
践を実してしまうことが起こりがちになるので
はないかと思います。

先生方との出会い
それから、あの当時、大学の先生方は私たちの頭
脳と感性と同時に、胃袋でも満たしてくださる存
在でした。日本社会事業大学の給料は決して高くは
かったと思います。しかし先生方は絶えず私たちの
胃袋を満たしてくださって、私などはご自宅にも食っ
たりして触れ合いの時が得られ、懐かしくて大事で
、なんと素晴らしい触れ合いの時を与えてくださった
のだろうという感じでいっぱいです。そうした先生
方に巡り逢えたことを本当に嬉しく思います。どう
ぞ先生方および学生のみなさま、振り返ったときに、
あんなにすばらしい出会いを経験していたのだとい
うことを、一コマーマに作り上げていく学校の気風
であってほしいと思います。それは階層という形だ
けではなくて、今、私がここに存在しているという
ことを考えたときの大事な基礎が育まれたというこ
とに関連してでございます。

ケース事例に学ぶ
それからケース事例に学ぶということを実践と理
論ということの中で出していますけれども、忘れ
ることのできないいくつかのケースがあります。そし
てそのケースを通して、私自身の傲慢さというもの
をいつも自分の中に突きつけております。大学を出
て、私は佐賀県出身にして福祉事務所の職員と
して働き始めました。一人暮らしのお年寄りがいらっしゃ
いました。病気からでご自身の身のまわりもうま
くできない、そういう姿があったのです。家庭訪
問をした私はこのお年寄りに、「不自由なので老人
施設に行かれた方がいいのではないか」というお話
をしました。でもこの方は頑として、「自分は家庭
で生活したい」とおっしゃっていました。でも、あ
るとき火の始末が悪くてボヤを出されたのです。近
所の民生委員の方々、そして総務の方々含めて、ちょっと
と心配だというお話があり、離れれたところに住ま
れていたお孫さんを呼びまして、お孫さんの説得で
老人ホームに行かれました。

老人ホームに行かれたとき、もちろん私も同行し
ましたし、その後も「あるように嫌な思いで行われ
たけれどもどうしょうにゃしゃるしかしながら」というこ
とで参りました。その時にお年寄りが私に「ありが
とうございました。もっと早く来ればよかった」、ご
食のご飯も食べさせてもらって、お風呂もきちんと
入れて、温かいみそ汁ってこんなにおいしかったん
ですね」とおっしゃいました。だから私は本当に措
置でこうして良かったという思いがあったのです。
私の道筋は間違ってなかった、そういう単純さがあ
りました。それから1ヶ月しない間に、このお年寄り
は亡くなりました。私は、自分決定に導くということを
このケースの中で学び、大学の中でも学んで
参りました。そしてケースの処遇方針の大仕事、こ
れも私たちは仰き込まれました。しかしこのケー
スでは、「ありがとうございます」と私に言いながら
、実は生きる希望をなくしていたのではないかと
も思います。亡くなったお年寄りからそのことを聞く
時間は私にはありません。あるままの生き方、
これを受容するということ、そのためにその人が願
う自己実現というもの事を私はどのような思いの中で
考えていたのか、もしかしたら一番大事な人間とし
ての共感性ということを忘れていたのではなか、
これは今でも私の中にずっと引きずりながら残って
いることです。

また、小さな子が虐待を受けて慈愛園乳児ホーム
に参りました。父親は母親から逃れられ、この子に
虐待を重ねるのです。この子の祖母がこの子を抱い
て役場に駆け込み、そして私の施設に来たのです。
子どもに対しての面会はありませんでした。この母
親は別の所にいるという情報を聞きましたが、私は
連絡を取りませんでした。この子が中学3年生になった
とき、母親が訪ねて参りました。「子どもに会わ
せてほしい」という言いました。私はこの母親に、
「あなたは一度だって面会に来なかったじゃないの、
就職を目的としたこの時期に来るということは、本
当にあなたは母親として会いに来たの、それともこ
の子はこれから稼ぎ手になると思って来たの」。そ
う言いました。母親は私に「馬鹿野郎」といいながら
ら面会はしないで帰りました。私は会わせなかった。間違っていなかった。「会わせなくてよかった。会わせていたらきっと大変なことになっていた」などと笑っています。この子が高校に転校になった時、「あなたのお母さんが中学3年生の時に会いに来た。でも私はあなたには言わんで、会わせなかった」などと言いました。これはすごくショックでした。そうなので、選ぶのは本人なのです。それも援助していくのが私たちだからです。

また、行動レス送帳候群と呼ばれる病名をつけてくれ、頸部も体中も筋肉質で大人のような子どもが私の所にやってまいりました。離婚したケースで、「この子の頸部は離婚した相手にまっすぐ、私はどうしてもこの子を受け入れることができない」と親が言うのです。でも子どもは親を求めます。私はその事例に対しては会面させるべきだと思っていました。しかし、何度も写真を送る手紙を出して会面を促しました。でも、車で来ても体は車に置いてしまって、足だけが外にあるのです。子どもは車のそばに行き、一生懸命何か話しているのです。この子が15歳の誕生日を迎えるとき、「先生、お母さん会いに来るものかな。誕生日忘れてないかな」と何度も何度も言います。私はこの子に、「Aちゃん、15歳になっていうのは恥はずれ」という話の中で、「お母さんはAちゃんを愛していない。そのことはAちゃんだってわかっているのだから少し大人になって考えたらどうか？」と言いました。この15歳に処したAが何と言ったか、「先生、お母さんよ」と言ったのです。切ることのできない親と子どもの愛情、おそらくAの頭の中にあるのは現実から離れた母親像であったと私は思います。しかし、現実の母としてこの子がしっかり見極められない、この子は本当の自立はできなかったのです。子どもは経験や体験することをよくわかります。でも、体験や経験をしなくても、想像で補うことはできます。しかし、想像は想像の範囲に過ぎない。現実ではない。そうしたことを私たちは忘れてはいけない側面もあります。

今、学生の皆さんは、学ぶという領域で頭脳に対しての働きやたくさんの教科書があります。ヒューマンサービスという福祉の領域の中で、人間の感性と人間だけが持っている姿勢、それは学問だけで形されていくものではなく、私たち人類が日々として築いてきた文化的な所営、あるいは伝統性や四季折々の通廃儀式の中には存在している人との交わり、こうしたものの中の積み重ねがあれば、本当に求められているサービスにたどり着くことはできないのではないか。「気づきは運」、自分は今もそのような反省の中にいるということです。

副知事、そして知事へ

しかし、私はこれらのケース例に学びながら、福祉というものをずっとライフワークにしていきたいという願いを持ってきました。そのような中で1999年の2月26日、前知事から副知事になってほしいという要願があり、1999年3月16日、議会の承認を得ました。大変不思議なことだったのですが、一人の対象者もなく済む一案という中で副知事に就任しました。やがて2000年2月25日、私は副知事に選ばれたその知事は急逝されました。新しい知事がおいでになるまで職務代理人としての役割を果たしていた。そう決心しておりました。でも、いろんな方からの要請で、知事として選挙で挑戦することができなくなりました。

私は自分から進んで知事で選挙戦をしようとは考えていませんが、パラマッチとはこういうものなのかしらと思うほど、朝の日にいろんなマスコミに追いかけられました。私が新聞に掲載される、私が家に帰ることができずに友人同士の話をとる、大きな変わらぬ帽子みたいなものをかぶって出掛けなければならないほど大変なことでした。秘密のエレベーターを使って副知事官に行く、出るときにも秘密が先に行って誰もいないことを見計らってどこへ行く、そういう本当にすごい経験をしたのです。私が決心したのは、21世紀の熊本県の計画を立てる中でもあるということと、予算の編削をしていたということでありま

熊本県では副知事は一人ですので、すべてのこととかかわりを受ければならないという状況がありました。1999年2月26日に就任して、2000年の2月25日には知事がいない、そして1999年3月16日議会の承認を得て、2000年3月15日に私は副知事に辞め、人知で計りがたい思いの中で知事選に参り
しました。
二人目の女性知事を生み出した熊本というのは、むしろい男女共同参画の先鞭をつけていったのでないかと思います。時間がないのであまり事例を申し上げることはできませんが一つだけ事例を申し上げると、ある農村地域で、私とは対立候補を応援している息子さんをお持ちの女性がおられました。対立候補の方は農協を地盤として県会議員を経て、参議院を経ていった。選挙上手で右に出る人はいないという人です。私が立候補したときはすぐに出選されていて、潮谷はだがあろうという風潮がございますが、あたってわけに、農協の役員をしている息子さんが力強く私の対立候補を応援する。その息子さんの母親と私は会ったこともなかったのですが、自分の頑張るべきもの、それを近所の人が見て、「あなたのことの先生は、あなたの息子の間、行って困ってであるよ、いえ加減にしたらどうか」と、このことの言ったのです。するとこの息子の母親は自分の夫に、「あなた、息子に付くつもり？ 私に付くつもり？ もし息子に付いたら私はあなたの老後なんか知らなかね」と言ったのです。

このような女性たちは、今、テレビで「潮谷」という名前が放送されました。「潮谷が何をしたのか」と家事の手をやめてしっかり耳を傾けている。そういう恐ろしい存在に変わってきています。

「創造にあふれ、生命が脈打つまま」と
私は知事として今、何をやっているかとしているのか言いますと、まさに福祉の中で学んだ事、それをそのまま政策課題の中に載せています。福祉とは幅広い領域を含んでいると確信しております。
実は私が知事でやったとき、「農業がわからない、農業をしたことがないからわからない」、あるいは「女のくせに何かわかるか、よそ者に何かできるか」と、私は佐賀県の生まれなのでそういう批判がありました。そのことごとくに対して私を支持してくださる人たちは何か言ったかという、「私たち女はよそから嫁に来ている、私たちが役に立たないというのか」という反論がありました。私の会員、知事目指そうと思った時にまたまた女であったにすぎない、知事というのは男であっても女であっても、人間としてどのような県政を展開するのか、これが大事であるということを言い続けました。そして選挙の公約の中で政策を述べました。私は最初、農業がわからないということをあまりに言われたのですから、私の農業政策ということで福祉を引っ込めて話をしておりました。しかし、若い靑年たちが「県民は何を望んでいるのか」ということで3000名にわたるニーズ調査をやってくれた結果、その第1位は福祉であるという結果が出ました。それが出てきたときに確信して、私は福祉をやりますと声を高めかんに言ってまいりました。

その手法として何をやったかと言いますと、「県民こそ県政の中心である」ということです。それは大学で学んだクライアントセンター、対象者中心主義です。それからケアワークの中で本当に大事な部分であります傾聴、それを私の政策の中で対話型の県政という形に変えました。そして福祉を展開していくときに、サービスメニューと自己決定、これが本当に大事になってきます。また相手のニーズをしっかり受け止めること、これが大事です。しかし、ニーズに100%公的なレベルの中で応えられるかどうか、それは別問題です。だから情報公開をやりました。県は何をやっているのかわからないということでは困るので、説明責任を果たしていくということをやりました。そうした福祉の手法が、私の知事としての政策の中に息づいています。

最後に、県政の計画の中で私が大きくテーマにしたことは、「創造にあふれ、生命が脈打つまま」と。これを21世紀の総合計画のキャッチフレーズにいたしました。なぜこれをテーマにしたのかということを私の話の終わりにしたいと思います。

私は慈愛園乳児ホームの中でずっと生活をして参りました。医学部の先生がいらっしゃいますならばお気づきの通り、かつては800グラム、1000グラムの子どもたちが助かる率は本当にありませんでした。でも今は助かります。そんな子どもたちが施設に入って参ります。入ってくる親たちの背景は、どうして私はこんな子どもを産んできたのだろうという自説や、ひそんでいた精神障害を引き出す、そういった大変深刻な事例があります。一人の子どもが私の所へ参りました。早産をして生まれた子どもです。1000グラムに満たない赤ちゃんはたくさんのある障害を持っていたました。ドクターたちは「この子
は自分で喋ることも歩くことも期待はできません、重度です」と言われました。保育士や看護婦、栄養士、来日も来る日もこの子にかかわりました。病院もリハビリテーション、脳外科、眼科、小児科と、いくつかの病院を回りました。それが、退ればなるが、快くなりがまでもなく、ハイハイが始まり、人がたる発達の筋道を遅れながらも成長していりました。私の所の保育士や看護婦、栄養士は、「今の医学はすごいですね」と言います。私もすごいと思います。何と日本の医学や教育は素晴らしいレベルに達したのかと思います。でも、そんなに頑張ってくれた職員の方々にも本当にありがとうとしました。

もう一つ、医学や科学や教育発展させ、支え続けていたものは何だったのだろうか。重度の障害を持ち生みましたその子を預けに来たとき、その母親は「こんな子、社会のお荷物ですね、役に立たない存在です」と自罰的に言っていたが、障害がある子どもたちは社会のお荷物なのだろうか。役に立たない存在なのでしょうか、そういう子どもの命の一つひとつが医学の領域や科学や教育を押し進めるエネルギーになりえないのだろうか。ドクターがナー、関係者のその命に対する愛おしさ、それが医学や科学や教育を大きくのものにレベルアップした根本のエネルギーだと思うのです。

今日、男性、女性ともに21世紀を迎える男女共同参画社会、それが国や世界のレベルや女性会議の中で言われています。「リ・プロダクティブ・ヘルス・ライフ＝生と生殖、その権利」についての論議は日増しに高まっています。中絶の権利は、産婦人科のドクターたちは圧倒的に多数をもっと早くから、しかも相手の同意なしという形で法の整理はされましたが。でも、私は男性と女性が出会うまで、そこには男性女性の権利と人格の根付いた平等性が求められることは、ひとたびが体内に宿ったとき、もしそれを社会の全体的な基盤の中で支えていく基盤づくりこそ大事ではないでしょうか。脳死の問題を言いますと、脳死も人間の死であるならば、人の命が始まりはどこからと考えればいいのでしょうか、体内に命が宿り脳ができるまでの6週間、そこからが命の始まりであると考えることが大事ではないか、そんな気がしてしまわないです。

未婚で出産をする。それが前々からの通りの烙印であるような風潮の中で、生まれ育った家に足を踏み入れる事ができない、そんな辛さがありました。考えますと、どんな命の姿であっても一人ひとりの命が惜まれる、そうした様々な生命が戦打つ戦争、私願のいのちでは皆の本のみならず社会の大きなうねりとなってほしい、でも未婚の人が子どもを育てる、そこにはまさに人間としての生活をその人の上にどう現実していくのか、その人が願う生き方に対してどう考えていけばいいのかといえばまざが求めて参ります。社会の資源をこの中に活用していく、また私自身が学んだことと会との調整、そういったものが脈々としてどんな命でも生きることができるという思いをこのフレーズの中に込めました。中学の時に読んで読んだシュバイカーの伝記の中には、「人間は生きようとする命に薦めて生きていく存在である」とありますが、人間だけの命ではない、私たちを取り囲んでいるすべての多くの命、それごも目を向け合いつき、そして「その創造にあふれ」というフレーズは、イマジネーションの世界、クリエイティブの世界、そうしたものを一緒に形成していきたいという願いで作りました。

私の中に脈打つもの

福祉で学んだこと、私の体の中にしっかりと福社を根付かせてくれた仲村先生を中心とした日本社会事業大学で教えてくださった先生方に限り感謝を抱き続けています。面と向かって「先生、こうしてくださいましたね」とは言えません、しかし、私の総体の中に社大というものがあった、そして知事となりました今なお私の中に脈打っているものは、福祉をライフワークとする人間の歩み、それが私自身であると思っております。

県政の歩みは大変重要なものがあります、皆様方の手に私の随想を書かせていただいたものに配っておりますが、神学者のラインハルト・ニーバーは、「変えることのできるものについては、変える勇気を我々に与えられました、変えることのできないものは、それを受け入れる静かさを与えられた、変えることのできないものを、変えることのできるものを識別する力の知恵を与えたまえ」と祈っておりますが、まさにそれは私自身の祈りであったり
ニーズに応えたい、そう思っても多様なニーズに
応えられないことがたくさんあることを知りました。
ボランティア、NPO、その活動を今後ともしっかり
県に根付かせていきたいと考えているところです。
どうぞ学生のみなさん、これから「隣人と共にあ
る。隣人のために何ができるのだろう。隣人と共に
何ができるのだろう」、そういう思いの中で福祉の
学びを続けていただきたいと思います。そしてたく
さんのボランティア活動や実習や実践活動をしてい
ただきたい。たくさんの人と触れ合っていただきた
い、人に群れあうそんな自分であってほしいという
願いを込めて私の話とさせていただきます。本当に
ありがとうございました。